

高尾山 歴史の散歩道

44

明治大学博物館 外山 徹

大師堂その2



明治後期の絵図に見える大師堂と八十八大師(八王子市郷土資料館所蔵「武州高尾山境内全図」・部分)

現在の大師堂はその以前、明治の中頃までは大日堂と呼ばれていた。薬師堂(現存せず)、護摩堂(現奥之院不動堂)とともに、寛永(一六二四〜四四)の再興以来の伽藍を形成していたが、大本堂の建立(三四年・一九〇一落成)に際して移築されている。「武州高尾山境内全図」(明治三九年)では、大本堂に向かって右背後に大師堂という名の堂が描かれているが、堂の向きは大本堂と同じく南面しているもので、さらにその後動いたことになるが、この絵図では大師堂の周辺をはじめ山内各所に描かれた八十八大師が印象的である。

山内八十八大師
 大師堂とともに宗祖空海のゆかりとしてポピュラーなのがこの八十八大師の石像である。四国八十八ヶ所霊場になぞらえた大師の石像が、清滝の脇からはじまり山内各所に分布している。

大本堂落成の翌明治三五年九月、高尾山八十八箇所造立賛成員募集疏」が作成され、寄金が募られている。石造一体一五円(三〇・三センチ)三寸(一吋三・〇三センチ)。下台石二尺角高七寸の上に一尺角で高さ一尺二寸の台石が乗り、その上に尊像が安置される形だが、尊像とその下部の台石は一本作りである。さらに、小堂を建てる場合は金二〇円、寄付は個人でも、また講中によるものも受け付けられ、寄付者名が台石に彫られることになっていった。三六年六月竣工見込みとしている。また、五〇銭以下の寄付は惣供養所の空海木像の制作費に充てるとしている。現在大師堂に祭祀されている木像は比較的新しく戦後のものであるが、本堂内陣に一九二〇世紀と比定される木像があり、この時の造立の可能性がある。文面には興味深い記述

がある。岩屋大師は空海が東国遊化の砌に止住した場所であること、高野山と室生寺以外には高尾山だけに三宝山(仏法僧)が生息していることなど、空海と高尾山との縁が強調されている。このことは、明治のこの時期、高尾山内においても宗祖空海との結びつきを多分に意識する動きがあり、この時期、大日堂も大師堂と改められたことになるが、先の「惣供養所」に位置付けたのかも知れない。これにより、高尾山は、薬師如来、飯縄大権現を祭祀する聖地であるとともに、山全体がいわゆる新四国八十八ヶ所の霊場となったのである。

新四国とは、実際に四国に赴くことなく、身近な場所を巡拝できるようにした信仰形態で、一番の霊山寺から八八番の大窪寺まで、地域の真言宗寺院をそれと見立てたり、空海の石像ないし小堂を八八ヶ所設置した

ものである。一ヶ寺の境内に収まるものから、東京都葛飾区・足立区辺りから埼玉県東部にかけて分布する事例まで様々である。誰もが四国まで行くには制約もあるため、身近な場所に参拝の場を求めたのである。かつては、行衣に身を包んだ一団が御詠歌を唱えながら巡拝する姿が見られた。

山内の大師ゆかりの地

大師堂と八十八大師以外にも、高尾山内には空海ゆかりの場所や、伝承がいくつか残されている。『八王子名勝志』(弘化四年・一八四七以降成立)の記述は、琵琶滝の滝つぼに「梵字石」という石があるとし、「伝えいう、弘法大師この石に梵字をしるし百日参籠加持有て末代凡夫の病苦を救いたまう」と説明する。どのように「しるし」たのか、また、現在もこの記事に相当する石があるのかどうかは管見するところではない。『武蔵名勝

勝図会』(文政三年・一八二〇)には旧本堂の不動明王像と琵琶滝の上部にあたる雨宝陵という峰に安置されていた雨宝童子像を弘法大師の作とする記述がある。そして、現在その名がよく知られるのは、先の「募集疏」にも触れられた岩屋大師である。そこは、空海が訪れて修行をしたというのが名の謂れである。現在の岩屋大師のことであるか断定はできないのだが、琵琶滝の「傍に弘法大師の岩屋有り」という記事が、すでに『多波の土産』(文政十一年)という紀行文にあるので、伝承はそれなりに古くからあったものようだ。これらの逸話は空海の高尾山来山を記しているのだが、実際、空海が来訪して奇蹟を起こしたという伝承は全国各地に伝わる。しかし、その生涯を顧みても、若い頃の修行時代や唐から戻る際の九州から京への移動の道筋はともかく、北陸や東

国を巡歴したとはまず考えにくい。高尾山のケースも、文化財調査の結果からすると、平安前期に遡る彫像は現存せず、雨宝童子の像も所在は不明である。

とは言え、空海に対する後世の信仰習俗の特性を考えると、古来よりの聖地であった高尾山にそうした伝承が発生する必然性は考慮に値する。空海は入定後、その本地は仏であるとして神仏に列せられ、弘法大師の尊称で広く庶民の崇拜を集めるようになった。

高尾山と水分信仰

それでは、何故、各地に数多くの空海来訪の伝承が存在するのだろうか。これは、高僧である空海が来訪神信仰という固有の信仰形態に結び付いたからと評価されている。来訪神はマレピト、マロウド(客人)とも呼ばれ、外界・異界から神が訪れるというモチーフである。海からの漂着物を恵比寿

神の依代として祀るといった習俗も一例である。その外から来た神が人々の禍福をつかさどるといふ考え方であるが、いつか大師が来村して救済の手を差し伸べるといふ庶民の願望が各所における伝承の発生に結び付いたのであろう。その背景には、いわゆる高野聖をはじめとする廻国の宗教者の存在が指摘されている。

空海の霊験としては「水」にまつわるものがよく知られている。渴水で苦しむ人々のもとを訪れ、杖で地面を突いて泉を湧かせたという大師清水、弘法井などと呼ばれる伝承が各地に残る。なぜ水なのかは確かな説はないが、弘仁十二年(八二二)に讃岐国(香川県)で大きな溜池(満濃池)の普請を指導したこと、また、天長元年(八二四)に京の神泉苑にて降雨の祈禱をおこなったという事跡などから来ているのかもしれない。

水は生命の源であり、

農耕にも不可欠である。そのため、水源地を聖地として崇める水分信仰が古くからある。高尾山では、江戸中期には「泉札」という雨乞いの護符が発行されており、また、近隣の村々が雨乞いの祈禱をおこなった記録もある。案内川の支流である前沢川の上流にあたる琵琶滝のさらに上部には、雨宝陵と呼ばれる聖地があったことが江戸期の地誌に記載されている。高尾山の中でも前沢一帯は水分信仰の地であった。

大師ゆかりの伝承が、高尾山内においても水にまつわる場所―琵琶滝やその下流の前沢川沿いの巖窟に存在するのは、それなりの必然性を伴うものと言えるのではないかとおこたわり、史料の引用については、読みやすく原文に手を加え、適宜読み仮名を付しています。

《参考文献》
 日野西真定編『弘法大師信仰』(雄山閣出版、一九八八)